

# 先生、日本ってすごいね！

服部 剛著 高木書房

1500 円＋税

## 目 次

- まえがき
- 1 「戦場の知事 島田叡～沖縄の島守」役割と責任
- 2 「やまと心とポーランド魂」恩を忘れない
- 3 「エルトゥールル号事件」感謝の心
- 4 「ペリリュー島の戦い」崇高な精神
- 5 「焼き場の少年・一片のパン」人間の気高さ
- 6 「海の武士道～敵兵を救助せよ」生命の尊重
- 7 「日本マラソンの父・金栗四三 3度のオリンピック」努力を続ける
- 8 「佐久間艇長の遺書」役割と責任
- 9 「柴五郎中佐」勇気ある行動
- 10 「上杉鷹山 為せば成る」誠実・責任
- 11 「ユダヤ人を救え 樋口少将と犬塚大佐」差別偏見の克服
- 12 「特攻隊の遺書」先人への敬意と感謝
- 13 「昭和天皇とマッカーサー」強い意志
- 14 「空の武士道」利他の精神・人間の気高さ
- 15 「日本ミツバチの団結力と日本人の道徳」集団生活の向上
- 16 「板東捕虜収容所 松江豊寿中佐とドイツ人捕虜」寛容の心
- 17 「台湾人に愛された八田與一」公正公平
- 18 「絆の物語～アーレイ・バーク」日本人の伝統精神と集団生活
- 19 三年間、服部道徳を受けて生徒の感想
- あとがき

服部 剛（はっとり たけし）先生のプロフィール

昭和 37（1962）年 神奈川県横浜市生まれ。予備校講師を経て、平成元年より横浜市公立中学校社会科教諭。元自由主義史観研究会理事。現「授業づくり JAPAN 横浜《中学》」代表。

著書『先生、日本のこと教えて～教科書が教えない社会科授業』（扶桑社） 共著『国境の島を発見した日本人の物語』（祥伝社）

ブログ：授業づくり JAPAN 横浜《中学》「日本人を育てる歴史と道徳」

# 日本マラソンの父・金栗 四三(かなぐり しぞう)

## 三度のオリンピック

日本で「フルマラソン (42,195 キロ)」が定着したのは 1911 年です。それは翌年に予定されていたストックホルム・オリンピックに向けての国内予選でのこと。これが日本で最初の公式マラソンでした。

日本マラソンの始まりは劇的でした。羽田からスタートして川崎を経て、東神奈川で折り返すコースです。この大会で金栗は、雨風の悪条件の中、2 時間 32 分 45 秒のタイムで優勝し、なんと当時の世界記録 (2 時間 59 分 45 秒) を 27 分も縮めたのです！

東京中に号外が舞いました。この驚くべき記録で優勝した金栗は、翌年のストックホルムオリンピックに「日本人選手第 1 号」として出場が決定しました。この時、20 歳の若者でした。

金栗は、明治 24 (1891) 年 8 月 20 日、熊本県和水町の造り酒屋に生まれました。父親が 43 歳のときに生まれたので、四三と名付けられました。小学校時代は往復 12 キロの道のりを、毎日走って通学したといひます。中学校時代は特待生に推薦されるほどの秀才で、スポーツの経験はなかったそうです。

東京高等師範学校 (現筑波大学) に入学した金栗は、校長の嘉納治五郎 (講道館柔道創始者) に才能を見出されます。陸上競技部に入部し、独特の工夫とアイデア、人の何倍もの努力を積み重ね、たちまち学校を代表するランナーに成長していきました。

オリンピック代表選手に選ばれた金栗は、国際オリンピック委員会 (IOC) の委員でもある嘉納校長に、胸の内を打ち明けました。

「先生、羽田のレースでは幸運にも勝つことができました。しかし、十分な練習も準備もできていないまま、たとえ 3, 4 ヶ月のトレーニングを積んだとしても全く自信はありません。行けば絶対に勝ちたいを思うでしょう。また、勝たなければ期待してくれる国民に申し訳ありません」

オリンピック出場に迷う金栗に対して、嘉納は「君の足で、君のマラソンの力で、日本スポーツの海外発展のきっかけを築いてくれ。勝ってこいというのではない。最善を尽くしてくればいいのだ。日本のスポーツ界のために『黎明期の鐘』となりなさい」説きました。黎明とは、夜明けのことです。「黎明の鐘という言葉にしびれた」と金栗は決意します。

「実力を発揮すれば必ず金メダルが獲得できる！」

マラソンシューズなどは持っていないので、金栗は底を厚く縫い合わせた足袋を履いて競技していました。この格好で、絶対に優勝してみせるとの信念で、ストックホルムへと向かいました。

開幕の直前、組織委員会から「日本の国名標示をどうするか」と問い合わせが来ました。金栗が「正式の国名どおりに漢字で『日本』にすべきでしょう」と提案。「それでは外国人には読めない。やはり英語で JAPAN に」と国際通の監督。ところが、金栗は「それは外国人が勝手につけた名前

です。『日本』という本当の呼び名を使い、世界の人々に知らせる必要がある。JAPAN ならプラカードを持つのをやめます」と譲りません。困ったみんなが一斉に団長の嘉納治五郎の顔をみます。「ウーム、どちらも一理ある。発音はニッポン、標記はローマ字。つまり NIPPON かどうか」。この調停に一件落着きました。

このエピソードは、金栗が母国日本のために戦うと強く決意していたことをよく表しています。

オリンピック最終日、マラソン競技がスタートしました。しかし、金栗は冬のマラソンしか経験が無かったのです。しかも当日は北欧では珍しい猛暑の 40 度近い炎天下、参加選手 68 人中で完走したのはわずか 37 人でした。意識不明で死者まで出る歴史に残る苛酷なレースになったのです。母国日本の期待を一身に背負った金栗も、初めての海外遠征・慣れない洋食・白夜とストレスによる睡眠不足がたたき、25 キロを過ぎたところで意識不明となりました。熱中症です。近くの農家に助けられ、目を覚ました時は翌日の朝になっていました。競技中に姿を消したので大騒ぎになり、「日本人選手が行方不明」と新聞にまで載ってしまいました。

金栗はあふれる涙をぬぐいながら日記に書きました。

「大敗後の朝を迎えた。自分の一生で最も重大な記念すべき日だったのに。しかし、失敗は成功の基、またその恥をすすぐ時が来る。雨降って地固まるの日を待つのみ。笑わば笑え。この敗北は日本人の体力の不足を示し、技の未熟を示すものである。重い責任を果たせなかったことは、死んでも足りないけれども、死ぬことは簡単なことである。生きてその恥をすすぎ、粉骨砕身してマラソンの技を磨き、日本の名誉を示そう」

帰国後、金栗は 4 年後のベルリン五輪大会を目標に練習に励みました。日本選手権などで 2 回も世界最高記録を出し、誰もが今度こそ金メダル間違いなしと期待しました。しかし、1914 年に第一次世界大戦が勃発し、オリンピック自体が中止になってしまったのです。

それでも、金栗はまったくあきらめませんでした。歴史と地理の先生をしながら、さらに自分の走りに磨きをかけます。そして迎えた 1920 年のアントワープ五輪大会。優勝を期待されながら、今度は寒さによる足の痙攣で無念の 16 位。次ぎのパリ五輪大会（1924 年）では、金栗すでに 33 歳。32 キロ地点で棄権を余儀なくされました。結局、金栗はストックホルムのリベンジを果たせないまま、悲運のアスリートと言われるようになりました。

金栗は現役を引退しましたが、指導者として大きな功績を残しました。その画期的な仕事のひとつが、マラソンシューズの開発です。底にゴムを張りつけた「金栗足袋」は、全国の運動会などで愛用され、多くの選手たちを助けました。

金栗は選手の育成、競技の普及のために全国をかけまわりました。心肺機能の充実をはかる富士登山競争、高地トレーニング、インターバル・トレーニングなど次々と新しい練習方法を取り入れていきました。

また「マラソンは孤独で辛い。だから競技人口も少ない」と、金栗はチームで練習をやりようと考え、箱根駅伝を企画しました。ふだんの練習をゲームにして、互いに励まし合って責任感とチーム

の和を育て、練習の質と量を高めてマラソンのレベルアップにつなげようとしたのです。

さらに、女性のスポーツが一般的でなかった当時、金栗は女子体育の大切さを説き、全国に普及させました。

金栗は常に日本スポーツ界の先頭に立って、全国を廻り、オリンピック運動や陸上競技の普及と向上に努めました。抜群の発想力と企画力を持ち、断トツの行動力と指導力を発揮し、日本スポーツ界のパイオニアとして活躍しました。戦後も全国マラソン連盟の会長となり、現在のマラソン界につながる試みのほとんどは金栗の発案なのです。我が国が長距離に強いのは、金栗のおかげと言ってもいいのではないのでしょうか。一方で後輩からは「お釈迦様」と呼ばれるほど、誠実で温厚な人柄でした。

現役時代から換算すると金栗の全走行距離は 25 万キロ、地球 6 周以上にもなります。世界のマラソン界でも金栗の名は知れ渡り、いつしか金栗は「日本マラソンの父」と呼ばれるようになりました。そんな彼のひとつの心残りがストックホルム五輪での挫折でした。

初のオリンピックを途中棄権してから 50 余年が過ぎた昭和 42 (1967) 年のこと、75 歳になった金栗のところにスウェーデンのオリンピック委員会から招待状が届きました。「ストックホルム・オリンピック開催 55 周年」を記念する式典に招待するというのです。実はストックホルム五輪のとき、日本チームは正式に棄権届けをしていなかったため、金栗は「競技中に失踪し、行方不明」として扱われていたのです。その「消えた日本人選手」が、今も健在であることを知った委員会が金栗を招待したのでした。その招待状には、なんと次のように書いてあったのです。

「あなたは、1912 年のストックホルム・オリンピックマラソン競技において、まだゴールされていません。あなたがゴールするのをお待ちしております」

金栗は、半世紀ぶりに思い出のスタジアムを訪れました。するとそこには、1 本のゴールテープが用意されていました。彼のためだけに用意されたゴールです。観客の割れるような拍手の中、金栗は 20 メートルほどの直線を走ってテープを切りました。スタジアムには、「ただいまゴールしたのはミスター・カナグリ。ジャパン。タイムは 54 年 8 ヶ月 6 日 5 時間 32 分 20 秒 3、これで第 5 回ストックホルム大会は、全日程を終了しました」とアナウンスが流れました。観客たちは、20 歳でスタートし、75 歳でゴールした金栗を声援と拍手でたたえました。金栗は、これに応じて「長い道のりでした。この間に孫が 5 人できました」とユーモアあふれるコメントを返し、ストックホルムの人々は大喜びです。

この記録はオリンピック公式記録として認定されました。今後、この記録が破られることはないでしょう。

昭和 59 (1984) 年 11 月 13 日、金栗は 93 歳で永眠しました。毎年冬の風物詩になっている箱根駅伝では、彼の功績をたたえて、最優秀選手に「金栗四三杯」が贈呈されています。

\* \* \* \* \*

ちなみに今年の箱根駅伝では青山学院大学の神野大地選手が「金栗四三杯」を獲得しています。